

# 結・たより, Vol.10

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1998.2.20. - 16p

請求記号:震災-6-z26

## 震災から3年たって...

1995年1月17日の早朝に起こった、阪神・淡路大震災から3年がたちました。甦ってくる思い、そして現在も進行形の思い、「ユイ」の会員の皆さんから葉書でよせられた、それぞれの3年目の“今”の思いを特集します。（到着順）

●定年を待たずして、神戸市を退職して、この九州最南端・串間市へ移住して約2年気候は温暖、人情豊か、食物は新鮮、物価は安い...、車の渋滞もないこの地がすっかり気に入り、永住も考えています。

どこにいても、何か満足できない点はあるかもしれませんが（特に行政に対する失望は大きいここでなければ、こうでなければというこだわりや執着を捨てると、思いがけない豊かな人生が開けてくることを身をもって経験しています。

串間の豊かな自然の中でゆったりと暮らす幸せを味わいながら、神戸の自然が破壊される方向から、守られる方向へ変わることを祈るのみです。

（串間市 白石方子）

●1月17日の3年目の朝、神戸の方を向いて手を合わせました。月日のたつのが早いものです。と共に復興の進歩の早さにも驚嘆しています。文明の発達の素晴らしさですが、人と人の持ち味もこの機に良い面の現れを感じました。人間の強さと原点を振り返らせ、生き方を教わったと思います。神戸の皆様はじめ、再び他の地方にも起きるかもしれない心構えで、身心共強く生きぬかねばと思います。“心のふれあい”を大切にしたい。

（京都市 久元洋子）

●今、3年前のあの日あの時の状況が再現されたかの如く、不安な思いの方がたくさんいらっしゃるでしょう。神戸の町を歩いていて、復興、復興と言われますが、何かがちがうのです。どうして仮設住宅が優先されないのか、...

思うだけで何もできない自分を敵視しています。神戸の町が大好きな町に戻りますように。

（三木市 赤松彰子）

●被災して3度目の1月17日、朝4時前から目覚めて5時16分になるのを待つ間、被災した町の様子が昨日の

このように思い出された。ねじれて折れた梁や柱や屋根は飛んで隣の屋敷を押しつぶし、その下で圧死した1人娘（婚約中）の死体と対面した両親の氷のような顔が、私の胸に焼きついて忘れられない。

東隣の家は我家の方へ倒れ、夫より遅れて死体で引き出された妻に毛布を掛ける夫の片腕は副本した包帯に血が滲んでいる。駆けつけた娘の裂けるような泣き声が流れる。

火の手が上がって猛火の海になって、生きたまま焼け死んだ祖母の骨を家族が拾う姿は人々の涙をさそった。私は悲しみをこえた怒りがこみあげて、“何故こんなことにー”と叫んだ。

あれからもう4年目になった今日は大寒の入りである。私の悲しみと怒りは恐らく死ぬまで消えることはない。避難所の寒さでもある。家を失った私はこの頃、被災者のおもいを詩歌に残すことが唯一、サバイバルになっている。

**暗闇の底に声して逝きし人の  
おえつ聞こゆる三回忌の朝**

（神戸市東灘区 橋本幸子）

●3年目の1月17日に

東京から総理大臣がやって来て  
一面の花の前で  
この日を風化させない  
などと言うのをきくと  
啞然としてしまう  
風化するほど時はたっていない  
私の家のすぐ前に立ち並ぶ仮設住宅は  
今も空き家じゃない  
道一本へだてただけで  
つぶれたのが自分の家だったかも  
しれないという想像力を  
なぜ持てないのだろう  
今 生きてることすら  
本当は奇跡なのに

家もつぶれず家族も無事だった我が家でも、勤め先を直撃したあの日から夫の長時間労働は3年たった今も続いています。ありきたりの日常に流されつつも、2歳と7歳のかかえて、揺れた怖さと生きているだけで奇跡と思えたあの日を忘れずにいたいと思っています。

（神戸市西区 金井塚美根）

●震災3年目の1月17日朝5時46分、あの激震を忘れようにも忘れられません。私の住む地域は被害がなく、また神戸に住む知人、友人たちも幸い、家屋を新築されたり修復されて、元の生活に戻っておられ、胸をなどおろしていますが...、でもまだ仮設住宅におられる方が多く、行政は何をしているのか？と怒ってしまいます。或いは都市計画の中に自分の土地を取り込まれ、意のままにならない住民の方の話を聞くと行政の勝手さにホトホト、情けなく思います。兵庫県、神戸市は「神戸空港」なんかを考え

ないで、早く一人も仮設住宅に入れておかないことを考えよ！！と叫びたくなります。また、国は税金を無駄に使ってくれるな！！と訴えていきたいです。

非常用持出し袋の点検も1月17日にしました。

(堺市 池側道代)

●3年前、一瞬にして神戸の街とそこに住む人の人生をかえてしまった出来事が走馬灯のようによみがえります。今年も1月17日に被災当時ボンヤリと歩いた道や避難所だったところを見て、街角に立ちましたがまだ多くの更地が目立ちます。

私はおかげさまで全壊した住居も再建されまして、春頃には元のところに帰ることができます。この3年間、友人、知人の方からご支援いただきましたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

「ユイ」のご活躍と皆様のご健康をお祈り致します。中川先生の生活者に配慮された建物、そのご活躍は新聞・テレビで拝見しています。

(神戸市兵庫区 森安子)

●あれから3年。まだ25,000世帯、4万人もの方々が仮設住宅で3度目の冬を迎えた。孤独死もすでに190人を越えた。肝心の被災者の立ち直りの遅れは明らかである1996年6月、トルコでの国連人間居住会議(HABITAT II)に参加し、被災地の実態を、“Voice from Kobe”として世界に訴えたにもかかわらずである。「一人の残さず」の決意で、復興にむけて微力ではあるが支援してゆきたい。

(姫路市 後藤安子)

●震災後3年が過ぎ、4年目に入った。1月16日の夜、布団の中で走馬灯のように3年間が走り巡る。復興に至っていないもの．．．（私の）気力。創造的復興をしたもの．．．震災から生まれたものすごい数の交流仲間 私の気力は震災から生まれたしっこい更年期障害だから仕方ない。嬉しいのはあの人、この人交流仲間である。一人に会い、その仲間に会い、関係性が生まれ、ネットワークが広がる。議員になった人、コミュニティ・ビジネスを立ち上げた人、ボランティアをし続ける人．．．。女性が行動している。手さぐりで自立の芽を探している。更年期のトンネルの出口はあるんやろか、一生懸命自立を求める女性たちの後押しをしたいとあせっているのに．．．。

(西宮市 田中道子)

●3年前から深夜ラジオのファンになり、なかでも天気予報と地震の情報に耳をそばだてるようになりました。そうすると日本の国の地震の多いこと、毎日のようにどこかで起きているような気がします。いつ我が身におきても当たり前と思いながら、起きるとうろたえると思います。

(茨木市 山田芳子)

●平成7年、震災の年の12月に三宮で初めてルミナリエを見ました。その華やかさに目をみはりながら、私は北区の仮設住宅で暮らす友を思い胸が痛みました。これだけの費用と電力で、あの人たちに温かい電気毛布を配ってほしいと。

そして2年目、3年目とルミナリエは回を重ねるごとに盛大になり、一方仮設住宅にはなお多くの人たちが、将来の希望を持てぬままとり残されています。孤独死の報道もあとを絶ちません。これが『復興』といえるのでしょうか。最優先されるべき『人間の復興』が忘れられていると思います。

(神戸市中央区 中島れい)

●ディハウス「めふのお家」を作りました自分たちの老齢期をどのように住まうのかと考えるグループホーム研究会のメンバーが、今、出来ることから始め、自分たちが老齢になった時、利用できる“しくみ”と“サービス”を地域につくろうと始めたものです。グループホームに向けて、ノウハウを蓄積していきます。NPO（民間非営利組織）として運営していきます。

(宝塚市 山本麗子)

●今も鮮明に記憶に残るあの日——1月17日。もし、あの時直前に目がさめなければ...、あと30分後だったら...、家具の倒れてくる場所が少しずれていれば...、ほんの運のよさというか、当時6ヶ月だった長男はどうなっていたらどうかと、思い出してもぞっとする。家族とも軽傷ですんだが、その息子も今は3才6ヶ月。その後長女が生まれ、そして今年の夏にはもう一人新しい命が誕生しようとしている。

長男には、大人になってどんな記憶が残るだろうか。3年たち、電気・水道・ガスも復旧し物資もあふれている。2年後に生まれた長女がほぼ同じ月齢だったため、離乳食を作りながら、“お兄ちゃんの時、新鮮な果物、野菜、牛乳もなくて困った。離乳食もストップして母乳だけにしたっけ”と思い出し、物資に恵まれて作れる喜びと毎日、お風呂に入れてやれることに感謝したものだった。そして今年の夏に生まれてくる子供を育てながら同じことを考えるのかなーと思う。震災の片付け等の無理がたたって流産してしまった子供のためにもこの子たちを元気に育て、震災を知らずに生まれた長女、そして？君にも、震災を通して得たことを教えていくことが次世代へのメッセージではと思う。

(尼崎市 中村貴代恵)

●自然への恐れ！

人間が造りあげたものなど  
一瞬にして消し去ってしまう大いなる力  
その自然に逆らうことなく  
少しでも元の状態に近く復興させ  
その中に今度の震災から得た知恵を  
生かして一歩前へ進みたいと  
思います  
我が家もまだ元には戻っていません  
でも失った物を生かして  
前よりも良い状態を作っていく  
つもりです

(池田市 大北祐規恵)

●年が明けて早々のある日、三宮のセンター街を歩いていたら、ばったりと知人のご夫婦に出会った。7、8年ぶりだったろうか。共働きで2人とも定年を迎え、子どもはなく、それぞれの趣味を活かして悠々自適の生活をしていらっしやると聞いていた。

「地震ではお家は大丈夫でしたか？」

まずはお互い確かめずにはられない。

「家も、何もかも失いました。あちこち転々として、この12月にやっと元の所に小さな家を建てるのが出来て．．．（涙声）」、傍らから夫さんが「本当に長かったですわ．．．、でも一番長かったのは新しい家に引っ越しする前の日、待ちどうしくて夢のようで、あの日が一番長かった．．．」と。

二人で肩を寄せ合うように歩いて行かれる後姿が心に残った。震災の日から、人それぞれの必死の生きる闘いが街のあちこちでまだまだ続いている。

（神戸市東灘区 尼川洋子）

●震災後3年、「がんばれ神戸」の文字がふとアセテ見える時もあります。でもそれは思い違いであることに度々出くわします

決して金や物資で解決し得ない、心の問題が沈殿し続けている人に出会います。先日、「周囲がサラ地になって、ただ1軒の隣人が越されていくことになり淋しくて、恐ろしくて」と訴えられる方に出会いました。80歳をすぎて、お元気で一人暮らしが可能なだけに、子どもにも言いづらい、行政にも全面的に頼ることもできず、というよりかかりどころのない生活が3年過ぎたところで、新たな悩みがわき上がってくる現実。崩壊したコミュニティは、コミュニティを作ってきた期間ほどに再生にかかるとしたら、そこに住む人々に心を寄せ続けることこそ大切だと思います。

自立と共存のバランスをどうとるかは、答の出ないところですが、マスを念頭におきつつ、個々の出来事に心配りがいると考える今日このごろです。

（芦屋市 林雍子）

●あれだけの大地震です。まちの復興、すまいの再建、被災した方々の不幸な体験が癒されるまでには、まだまだ時間がかかるでしょう。その反面、

- ・被災地における道德観念の高さを示す規律ある行動
  - ・全国規模での奉仕活動の盛り上がりと継続
  - ・短期間で被災から立ち直りつつある、たくましい人々の存在
- などに、人間の素晴らしさと将来の希望を感じます。

（枚方市 井村俊明）

●震災は私たちの社会がかかえる歪みを拡大してみせた。震災直後の難民状況での、性別役割分担では、女の家事負担の軽減を家電製品の導入に頼り、男性との分担による解消に進んでこなかった事実をつきつけられたし、財産の被害や失業のストレスをかかえた夫が妻に振るう暴力は、夫の精神安定まで妻の仕事に割り当てる夫婦関係の枠組みをあぶり出してみせた。

私たちの社会は震災から何を学び、何を獲得しうるだろうか。そのために私は何ができるのだろうか

か。

(神戸市東灘区 長谷川京子)

●地震が一つの、いや大きな原因となって私は、TURNING POINTをむかえた。

11年つとめたマンションデベロッパー企画の仕事を辞め、人と環境に負荷の少ない家づくりに挑戦しはじめた。要因は大きく、三つ。

一つ、建設とは将来のゴミの生産であるにもかかわらず、当事者はまるで無知であることに気がついた。子供たちの時代に、これ以上つけを残してよいものか？こわれたら土に戻り、燃えても害の少ないものを作りたい。

一つ、再建された街には制服のようにプレハブが建ち、景色がさびしくなったことへの反発。ハンドメイドの暖かさのある家族の主張のある家が好きだ。

一つ、自分たちのささやかな家を建てることになった。そこは震災で家が倒壊して祖母が亡くなったところ。明治生まれで、「女は仕事をもたないとダメ」と言い、ナチュラリストで庭にコンポストらしきものや薬草やボーボー生えていて、医者知らずの強い人だった。イイカゲンなものは建てられない。

もう一つ、人間いつ死んでも後悔しないよう、言い訳しないよう、やりたいことをやろうと思った。

(神戸市東灘区 前田由利)

●被災地のその後の状況について、さまざまなメディアを通して見たり聞いたりしても、支援団体とのかかわりも切れてしまった私には、見るだけ聞くだけの後ろめたさも手伝って、むしろ避けたい気持ちが正直なところでした。

しかし先日、第2次世界大戦下のナチスによるユダヤ人虐殺計画について、当時を知る人々の証言で綴るドキュメンタリー、「SHOALT」を見て、今までまるで知らなかった事実を知らされました。50年もたった現在、真実に迫っても犠牲者は生き返るわけではありません。しかし、あの過去を記録し、できるだけ多くの人を知り、後世に語り継がなければならないと思い知らされました。

大震災の被害と復興の過程も同じなのだと思います。情報を避けることなく、まず見ること、聞くことから始めなければと考えているところです。

(泉大津市 和田里子)

●震災で自宅が倒壊し、友人夫妻が亡くなりました。3年後の今月17日には、遺された息子さん、娘さんがもとのところにお家を再建し、お墓も建てられましたので、友人たちがお墓まいりをしました。お花を缶ビールをお供えし、私たちもお墓を囲んで缶ビールを飲みました。

神戸の街を見下ろす六甲の中腹、冬景色の中でも、木々の芽はひっそりと用意されていました。

(神戸市灘区 高橋佳子)

●大阪に暮らしはじめて、3年になる。バルコニーの窓側は東方に面し、生駒山の上にお陽さまが昇る。玄関側は西方に面し、ビルの峰々の向こう、六甲の山なみがいまするあたりにお陽さまが沈み月が昇る。ちょうど、before'95. 1. 17. に私がねむりについてたあたりに。

太陽と自分（地球）、月と自分（地球）の距離は随分違うものだが、まるで同じように見える。’95. 1. 17. もそのように存在する。かくして私の玄関のむこうにはいつも、after’95. 1. 17. の太陽が沈み、月が昇るのである。

（大阪市 弘本由香里）

○以後に届いたお便りは次号に掲載します

---

## BOOK

「わが街 東灘区森南町の人々」

野田正彰著 文芸春秋1996. 7

森南町は神戸の東端、東灘区のそのまた東端、芦屋市ともうほとんど隣接している小さな住宅街である。西隣の本山中町と共に激震を受け、大半の住宅が倒壊した。そして森南町では78人の人が震災で亡くなった。両親を亡くした人、一緒に寝ていて子どもたちだけが死んでしまった人、一軒の家、一組の家族、近隣が、あの地震の一瞬を境に激変してしまったのだ。

地震の直後から1年にわたって、森南町に関わり続けた著者が人を心を、町づくりを繊細なまなざしでレポートする。（尼）

---

## 住まいに求められるもの ～ライフストーリーとアイデンティティーから～

[新聞記事あり 省略]

---

## これからの住まいについて考える part2 ～ノルウェーのコ・ハウジングを訪ねて～

弘本由香里

前号で、デンマークの高齢者住宅とシニア・コ・ハウジング（オールド・ピープルズ・コレクティブ・ハウジング／高齢者向けの協同住宅）の紹介をした。日本でも、高齢者向けの公的住宅の供給は進められている。阪神・淡路大震災の復興公営住宅では、高齢者の孤立を防ぐべく、コレクティブ・ハウジング（協同住宅）の取り組みも始められている。（＊デンマーク・ノルウェーのコ・ハウジングは、協同の家事等を前提とするコレクティブよりも、ルールの柔軟な協同住宅を指す）

しかし、両者の間に横たわる大きな違いを上げるとすれば、ひとつには北欧ではすべての人の生活の質を保障するという大原則のもとに、住宅の供給と生活を支える様々な社会的サービスや制度が一体的に、自治体レベルできめ細かく整備されていること、さらに重要なのは、それが行政から一方的に与

えられるものではなく、市民のニーズにもとづいて計画・供給されているものであり、少数の先鋭的な居住ニーズに対しても、社会システムが開かれていることである。

さて、そんな問題意識を持ちつつ、昨年晩夏の北欧の旅でデンマークの次に訪ねた、ノルウェーのコ・ハウジング（協同住宅）を眺めてみたい。ノルウェーの住宅政策・福祉政策の考え方は、基本的にデンマークと共通しているが、具体的にはそれぞれの社会や歴史を反映した特色がある。第一にノルウェーでは、第二次大戦後に持ち家政策がとられたこと。第二に女性の社会参加が進んでいる北欧の中でも、世界で最も早く女性が参政権を獲得し、女性議員数も現在世界一の46%に至っている点あげられる。こうした特徴が、ノルウェーの住宅・福祉政策に、大きな影響を与えているものと思われる。

持ち家政策の結果、現在ノルウェーでは、75%が自分で所有する住宅に暮らし、15～20%がノルウェー・コーポラティブ住宅協会連盟（NBBL）に所属する組合所有住宅に暮らしている。のこりわずかが賃貸のアパート・マンションというわけだ。NBBLは第二次対戦後の住宅不足に対応するために組織されたもの（現在105のコーポラティブハウジング協会と70万の会員）であるが、その後も社会的課題に応える非営利の住宅供給の担い手として重要な社会的役割を果たし続けている。

大多数の持ち家の居住者に対して、国と自治体は在宅福祉政策をとっているが、一方で持ち家のままでは暮らしにくいというニーズも発生してきている。このようなニーズに応える形で、自治体とコーポラティブ住宅協会が協力して、地域に開かれたサービスセンターと一体の高齢者住宅の建設を手がけている。高齢者住宅の入居者は主として、持ち家を販売した自己資金と国からの補助金に加え国や市のローンを利用して、居住権を購入する。同じ持ち家政策をとってきた日本では、高齢者が住宅を取得するのは困難を極めているのに比べ、ノルウェーは高齢者の住宅資金援助が法律として定められ、自己資金がない人のための国のローン制度が設けられている点は注目すべきである。

あるシニア・コーポラティブのモデルプロジェクトでは、83戸のうち20戸を市が買い取って賃貸としている。このプロジェクトの優れた点は、地域の高齢者が自身が、この地域の高齢者の住宅をどうしていくかという問題を、市に相談するところからスタートしていることである。入居者の選択についても、最終的な決定権は市にあるものの、居住者組織が希望者リストを提出するシステムがとられている。

こうしたモデルプロジェクトの背景に、これまでコーポラティブ住宅協会が居住者側からの発意と提案を受けてつくってきたコレクティブハウジングづくりの蓄積がある。デンマークやスウェーデンの先進事例に学びながら、女性の社会参加とともに求められてきた家事労働の合理化・平等化や、シングルやシングルペアレント、外国人や高齢者の新たな居住ニーズを居住形態に反映してきた試みである。



シニア・コーポラティブ住宅とサービスセンターの外域及び居室内 LANDASTORGET  
SERVICEBOLIGER/LANDAS SENIOR SENTERノルウェー・ベルゲン市



1975年には3つの女性関係組織とコーポラティブ住宅協会が共同して、一時代を画するソーシャルミックス型のコレクティブハウジングを生み出した。38戸の住宅は独立性を持ちながら、キッチンや食堂、集会室、ホビールームやアスレチックルームを始めとする共用施設を備え、保育所も併設している。建設後20年以上を経て、時代の変化とともに居住者構成も変化してはいるが、運営は今も居住者のニーズの変化に対応しながら柔軟に行われている。あたたかいインテリアに彩られた共用エリアの中には、持ち物を売買するリサイクルショップも開かれていた。居住者の計画・運営への参加によって、時とともに成長する協同住宅の姿がそこにあった。

市民のニーズをすくい上げ、社会的に解決していくために、柔軟な対応をとる社会システムが生きている。住宅・福祉の取り組みを進めつつある日本で、置き去りにしている問題、見逃してはならない課題が、ノルウェーの取り組みの中からも見えてくるのである。

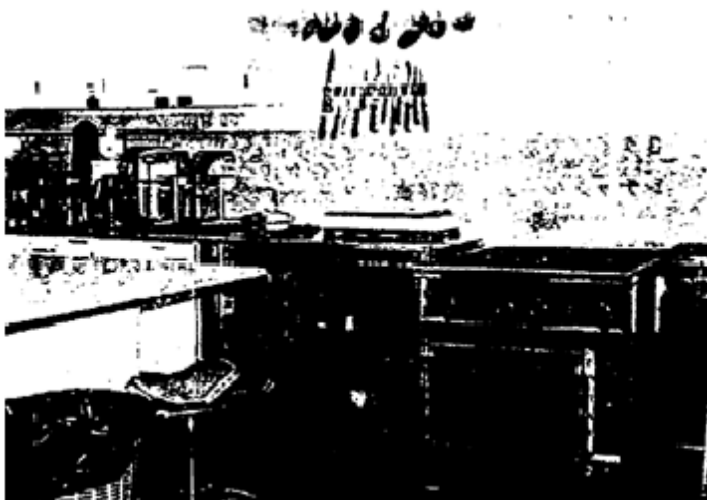


シニア・コーポラティブ住宅の居室内とサービスセンターの外観HALLINGSTADTUNT ノルウェー・リーエ市



多世代コレクティブ住宅の外観と共同居間の入り口と共同キッチンHOLMLIAノルウェー・オスロ市





---

## 「ユイ」とくさろん 報告

久々の「ユイ」とくさろんが12月20日中川俱子さん設計の上御影会館で開かれました。テーブルには前田由利さんが腕によりをかけたご馳走が並び、まずは再会を祝して乾杯。自己紹介と近況報告では、中川さん、尼川さん、長谷川京子さんのTV出演（熱演の模様は「結・たより」vol. 9）に話題が集中。長谷川さんがNHKからの出演料の支払いをとの電話があったので、カメラアングルが悪く、皆の評判がよくなかったので慰謝料として受け取りましょうと答えたわとの話に、「さすが弁護士！」と拍手と爆笑のうず。この映像をご覧になって「ユイ」に関心を持たれたお二人の参加がありました。

また、「震災から3年経ったのに、この頃気持ちが滅入ってしまって閉じこもりがちな。皆さんの元気をいただこうと思って...」、「ユイ」に託する思いはそれぞれ。この日は13人が集いました。

ひとしきりの歓談の後、メインプログラムの相川康子さん（神戸新聞情報科学研究所）の講演に移りました。この日が「NPOマネージメントスクール」の最終講義で相川さんは修了証と優秀論文副賞の図書券を手にしての講演となりました。



## 講演要旨

# 「NPOってなに？ コミュニティの中に新たな活動主体を創る——NPOスクールを修了して」

NPOとは、“nonprofit organization”非営利組織のことで、民間でありながら、公共性の高い事業を目指すものを指しています。利益は次の活動に回され、配当金が支払われることはありません。最近では“nonprofit”は誤解を招くとの理由から“not-for-Profit”へと変わりつつあります。NPOがなぜ注目をあびているのでしょうか。次の3点が考えられます。

### 1. 公共をどう考えるか

何かうまくいかないと行政の責任にしているのは、税がいくらあっても足りなくなります。行政は多数派のために動いています。サービスがうまく回る社会システムづくりには、小さな政府が必要で行政改革も取り組まれています。自分たちでやるともっとうまくいくのではないかと考えています。

### 2. 女性起業

女性の起業は、15～20年の活動の蓄積が今花開いたと言えます。ワーカーズコレクティブは15年前から、ニューワーク（奉仕と職業の間）は18年前からの動きです。ニーズがあるから新しい働き方が生まれてきました。

### 3. 震災復興

コミュニティのあるところは立ち直りが早いと言われてきました。行政の弱点はソフトです。自分の住む街をどんな街にするのか、まちづくり協議会が生まれて住民がまちづくりに取り組み始めています。震災直後はボランティアが何でもやってくれましたが、彼等が去った今はローカルのNPOが町の課題を解決していかなければなりません。

では具体的にはNPOとはどんな団体を指すのでしょうか？「非営利、独立的（Independent）、自発的（Voluntary）な第三セクター（行政でも企業でもない）」のことです。日本では「独立＝補助金ナシ」という考えが支配的で、独立的という概念が一番難しいところです。3分の1が会費収入3分の1が行政からの補助金、残り3分の1が企業からの助成金という考え方もあるようです。

ではなぜ民間がやるかというと、

#### (1) 先駆的事業に取り組める

行政はわからないことはやらない、企業は儲からないことはやらないから、民間でなければ新たな社会的問題の解決に取り組みにくい。

#### (2) 細かなニーズに応えられる

例えば、不登校の取り組みについて見れば、行政や学校はどうやって学校に行かせる考えるが、民間ではフリースクールでもいいのではないかと発想ができます。

#### (3) 批判性

オンブズマンの役目を果たし、行政を外部から監視します。

#### (4) 人間性

ほっとする人間性の魅力を感じるサービスが可能です。

最後に、どうすればNPOは根づくのでしょうか？

1) 女性のシャドーワークにどう光を当てていけるのか

「ポレ・ポレ」は市民活動から株式会社になりましたが、初期は福祉で金儲けするののかとの批判を受けていました。震災後のボランティアは滅私奉公的ファシズムがありました。その人が倒れたら誰がやるのか、共倒れにならないためにもお金を介在させることです。コミュニティワークを自分たちでやることでお金を回し、継続させることが可能となります。

2) 専任スタッフと無給スタッフをうまく調和させる

お金が回らないところには、優秀な人材が集まりません。優秀なスタッフがいなければ、行政に政策提言していくこともできません。人材の養成も必要です。

3) 資金はどうするか

日本では民間基金も小さく、少ないのが現状です。そこで、皆で基金を出し合うことも考えてはどうでしょうか。出生の祝い金や葬式の香典代などを地域内で積み立てれば、銀行から融資を受けられないところにも助成することができるし、赤字の補償もでき、さらにNPO法案などの制度整備やNPOマネージメントスクールのような形でNPOを養成することも必要です。

(講師の相川さんと、筆記している山本さん)



以上の講演を受けて質疑に移りました。「震災後のボランティア活動が発展して、業務が入ってくるようになったが、法人格がないので公共のものは受けられず、個人の名義で受けている。法人格のない団体の業務の受け方は？」「行政は一般多数向けでいいというのは震災後の復興で残りは民間がやればいいという考えを容認する。NPOが先駆的な働きをしていけば行政を今のままにしておくことにならないか」、「NPOは行政の補完的なものか、提案型か」「女性団体もNPOとして行政に政策提言できるような活動の在り方を」などの活発な意見が相次いで出されました。

最後に弘本由香里さんがデンマークを視察（「結・たより」vol. 9参照）して「社会政策へ女性解放運動が反映されており、住民デモクラシーが進んでいると感じた」と話され、また、初めて参加の池見さんからは被災地の子どもたちの様子を全国に知ってもらおうと描かれた絵本「神戸のなおちゃん」がプレゼントされました。

思いっきり語り、笑い、食べて、飲んで明日へのエネルギーを充電したひとときでした。（山本麗子

記)

---

## ヒューマンなまちづくりを！女性の視点を表現する ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」

●ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」は人と人、人と情報、人とさまざま活動との出会いの中から生まれる力を大切に育てます。

### 1998年の活動

- \* “ユイ・トークサロン”の開催（3回）
- \* 「結・たより」の発行（4回）
- \* 「ユイの本」の発行をめざす
- \* 各界で働く女性、専門家のネットワークづくり

### ●活動予定

1998年2月 ——— 「結・たより」10号発行  
4月 ——— 「結・たより」11号発行  
5月 ——— ユイ・トークサロン （1）  
7月 ——— 「結・たより」12号発行  
9月 ——— ユイ・トークサロン （2）  
11月 ——— 「結・たより」13号発行  
1999年1月 ——— ユイ・トークサロン （3）

### ●活動のモットー

**ゆるやかに 楽しく 元気に**

## 賛助会員、講読会員（1998年）募集

賛助会員：趣旨に賛同し、活動を支援していただける人。会費（年間）3,000円

講読会員：ニュースレターを定期講読していただける人。会費（年間）2,000円

●同封の振替用紙で、1998年分の会費の納入よろしくお願いします。

連絡先：神戸市東灘区御影町御影篠坪1383-1「アルプラン」内

ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」 FAX：（078）822-4141

■2月は“逃げる”と聞いたことがあります。あっという間に過ぎてしまうということでしょうか。

震災から3年、復興への努力はたえまなく続き、まちも私たちの暮らしも変わってきました。それと平行

して、ともすれば目の前の日々の仕事や雑事に追われて、流されてしまいがちです。

震災から見えてきたことを“逃がさず”にヒューマンなまちづくりを、社会づくりを息長くやっていきたいですね。（尼川）

---

(c) 1998ウイメンズ・シンクタンク・ユイ (デジタル化：神戸大学附属図書館)